

懷徳堂印 — 中井履軒編 —

中井履軒(なかいりけん)は、竹山の二歳年下の弟で、竹山と同じく懷徳堂内で生まれ幼少期を過ごしました。しかし、後に懷徳堂と一定の距離を置き、私塾水哉館(すいさいかん)において独自の境地を開いていきます。

『周易』『書経』などの経書(中国儒教經典)に関する膨大な研究は、『七経雕題』(しちけいちようだい)『七経雕題略』を経て、『七経逢原』(しちけいほうげん)として集大成されました。また、現在にいうところの自然科学の分野についても興味を示し、人体解剖図説である『越俎弄筆』(えっそうひつ)や、天体図である「天図」、顕微鏡の観察記である「顕微鏡記」、動植物図鑑である『左九羅帖』(さくらじょう)などの業績も残しています。

この履軒の世界を、印章という角度から見てみましょう。このサイトでは、懷徳堂文庫に残されている履軒の印章を、その印譜である『懷徳堂印存』(かいとくどういんぞん)とともに、データベースとして提示します。

「懷徳堂印存総覧」では、『懷徳堂印存』を実際にめくるようにして各ページを閲覧できます。また『印存』に対応する印の画像、および印面の画像も同時に表示されます。それぞれの拡大表示も可能です。

「印章・印影検索」では、50音別の「釈文」、および印影一覧から、『印存』の当該ページと印を検索できます。

※参考：湯浅邦弘「懷徳堂の小宇宙—懷徳堂印の研究—」(『中国学の十字路』、研文出版、2006年)、
『懷徳堂の印章』(大阪大学大学院文学研究科、2007年)、
「中井履軒の印章」(『懷徳堂センター報2008』、大阪大学大学院文学研究科、2008年)

メイン画面

印の画像からダイレクトに情報へアクセスできます

メニューはどの画面からでも開くことができます

はじめに

懷徳堂印存総覧

印章・印影検索

釈文・50音

印影一覧

懷徳堂

中井履軒編

大阪大学

文学研究科 懷徳堂センター



●履道坦々幽人貞吉(りどうたんたんゆうじんていきつ)

『周易』の語にちなむ語。正しい道を坦々と履んで野に隠れている人であれば、その心が穏やかで欲によって乱されることがないから、正しくて吉であるという意味。中井履軒の号の出処となったものがある。



●幽人之貞(ゆうじんのてい)

「幽人」は『周易』にちなむ中井履軒の号。正しい道を踏んで野に隠れている人をいう。



●履道坦々 幽人貞吉(りどうたんたん ゆうじんていきつ)

『周易』の語にちなむ語。上が陰刻、下が陽刻の連印かつ両面印である。



WEB懐徳堂 <http://kaitokudo.jp/>

懐徳堂印 — 中井履軒編 —



●幽人 處父(ゆうじん しょほ)／水哉(すいさい)

連印かつ両面印である。紐は中国古代の青銅貨幣「布銭」の形にもとづく。連印の印文「幽人」は履軒の号。「処父」は履軒の字「処叔」にちなむ。反対面の印文「水哉」は履軒が懐徳堂を離れて開設した私塾「水哉館」にちなむ。「水哉」は『孟子』のことば。



●幽 人(ゆう じん)

木製の連印である。「幽人」は『周易』にちなむ中井履軒の号。



●水哉(すいさい)

「水哉」は、履軒の私塾「水哉館」にちなむ。珍しい図案郭の木印である。



●水 哉(すい さい)

「水」と「哉」の陶製の連印である。「水哉」は、履軒の私塾「水哉館」にちなむ。



●水哉(すいさい)

懐徳堂印の中では唯一のガラス製である。しかも、紐の部分は、水の流れを髣髴とさせる流線的な装飾がほどこされている。紐の頭頂部から印面部に向かって、水が螺旋状に流れ落ちているかのようなようである。印文も、楕円形の単郭の中に、円転の陽刻の文字が刻まれている。うねるような「水」の文字が印象的である。



●積徳之印(せきとくのいん)／處(しよ)

「積徳之印」「處」の子母印。子母印とは、一つの印の中に、母(大)子(小)二つに分離した印が入り子になっているものをいう。母印は陽刻の「處」である。處は処の旧字体で、履軒の字の処叔に由来する。子印は陰刻の「積徳之印」。



●處(しよ)

印文は、履軒の字「処叔」に由来している。見逃せないのは、紐が象をかたどっている点である。懐徳堂には、この他にも、象紐の印が散見されるが、これは、当時、長崎に象が輸入され、世間の注目を浴びていたことによる。

●天楽(てんらく)／幽 人(ゆう じん)

「天楽」は、履軒の私塾の二階の一室の名。この印は陽刻で瓢箪型をした珍しい印であるが、さらに興味深いのは、「幽」「人」という陰刻の連印と両面印を形成している点である。「天楽」と「幽人」とは共通する心境の表裏なのであろう。

●履軒圖書(りけんとしょ)

履軒の蔵書印。篆刻者は、尾張藩大坂屋敷の役人で篆刻に長じていた中西石樵である。

●酔郷侯印(すいきょうこういん)

世俗を超越した履軒の心境を物語る円形の印。「酔」という字は酒を連想させるが、履軒は大いに酒を嗜んだそうである。

●尚徳積載(しょうとくせきさい)／既雨既處(きうきしよ)

両面印。『周易』小畜の解説によれば、すでに雨が降り陰陽の気が安らかな状態にあることを表す象で、陰の徳が積み重ねられ満つることを説く。篆刻者は中西石樵。

●南柯守印(なんかしゅいん)

南柯の夢の故事に基づく語。唐の淳于棼が酒に酔って槐の木の下で眠りについた。夢の中で槐安国に行き南柯太守となって栄華を極めたが、夢から覚めてみると、そばには蟻の穴があるばかりであったという。履軒は精力的な経学研究を続ける一方で、この俗世の虚しさを達観していたのであろうか。

●白衣御史(はくいぎよし)

「白衣」は無位無冠の意、あるいは無位無冠でありながら実質的には「御史」と変わらぬような立派な人の意である。履軒は、豊かな学識を持ちながらも無位無冠であることを、むしろ誇りに思っていたのである。

●徳公(とくこう)／徳公(とくこう)

両面印。「徳公」は中井履軒の通称「徳二」、名「積徳」にちなむ。

●叔(しよ)／完(かん)

「処」「完」の両面印。處は処の旧字体で、履軒の字の処叔に由来する。

●華胥國王之璽(かしよこくおうのじ)

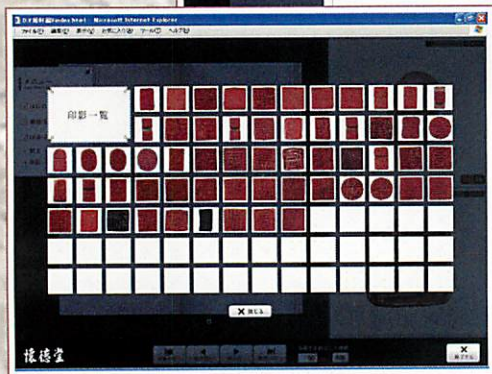
「華胥国」は中井履軒が自らの私塾に名づけた理想の国。「華胥国」とは、中国の伝説的な皇帝であった黄帝(こうてい)が夢の中で遊んだという理想国をさす。

●隱居放言(いんきょほうげん)

自らの姿を、やや諧謔的に記したもの。履軒はかつて、隱居放言し、清廉潔白な身を保ち、引退してからも正しい道を歩む人は、私のともがらであると述べたという。超然として自由な立場で放言する自分を、履軒は冷静に見つめていたのである。

懐徳堂印—中井履軒編—

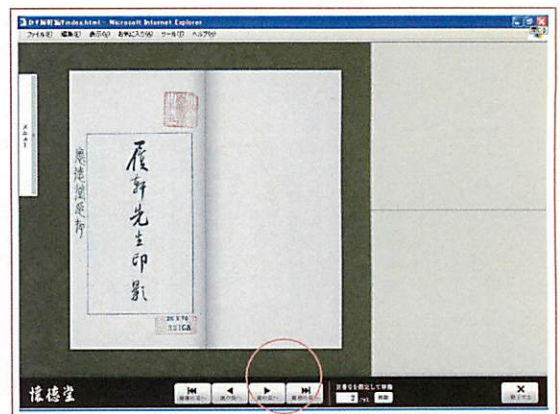
印章・印影検索「釈文一覧」



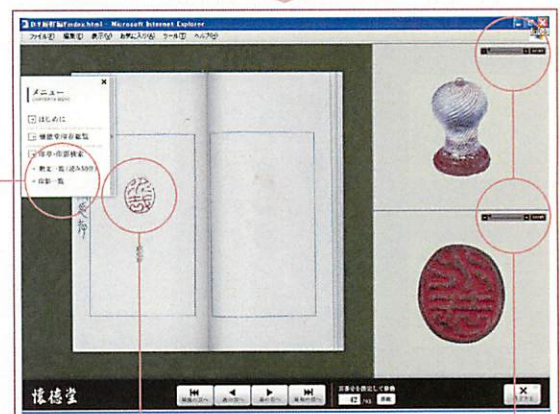
印章・印影検索「印影一覧」



印存画像を
ダブルクリック
すると解説が
表示されます

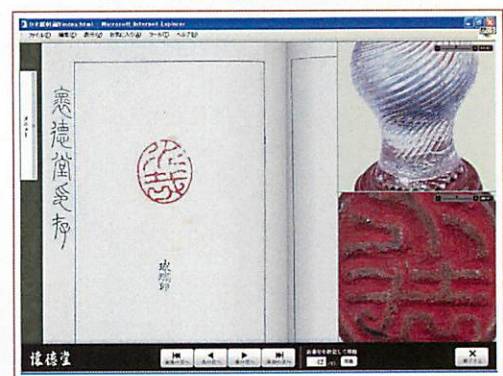


懐徳堂印存総覧



印存画像はクリックすると
拡大表示されます

ツールバー操作で拡大、縮小されます



WEB懐徳堂からの新たな情報発信

WEB懐徳堂に新たな電子展示のコンテンツが
加わりました。

- ①懐徳堂印—中井履軒編—
- ②懐徳堂四書—「大学」編—

①では、懐徳堂印の印譜である『懐徳堂印存』
の内、中井履軒の部を電子化し、実際の印の画
像もあわせて閲覧できるようにしました。先に公開
した中井山編の続編です。②は懐徳堂の「四書」
注釈の内、中井履軒の「大学雑議」を電子化しま
した。『礼記』大学篇、朱子「大学章句集注」と対
照できる便利な研究ツールです。



各コンテンツへ